

し、底は藤をもてめぐらし、編こと蜘蛛のあみを結ぶがごとし、三の大索、月毎に一筋を更るといふ、其往來のしげきこと知るべし、飛驒より越中に行道あまたあれど、此道便なればとかや、此餘椿原荻町、共に此國大野郡にして、此籃もて度ること同じ、荻町は其地ことに險隘、其河渡駛、玄かも東岸高く、西卑ければ、階梯をたて、登りて籃に就、椿原は是よりも猶危しとぞ、記者中山を賦せる古詩の歌體、長篇あれど、事繁ければ洩しぬ、いにしへ衣笠内府の御詠とて、其所につたふるは、徒にやすく過來ぬ山藤のかごのわたりもあれば、有物を、おのれにも歌をこはれて、とみに口ずさむ。

波分しまなし堅間のふることも、斐太にありてふ渡りにぞ思ふ

〔稻葉集〕下 同じ國同じ郡同じ郷○飛驒國吉原郷中山村より越中國蟹寺村にこゆる所の神通川といふに綱引はへて、籠にて引わたすを、かごのわたりといふとぞ。

神の代の目なしかたまの小船すら水なき空をわたりやはせし
見るだにもあやふきものをのるかごのめもくるめかず渡る里人

〔加越能山川記〕越中庄川

庄川は、礪波郡に在○中略凡この庄川は、飛越兩國にて二十瀬計谷々落る、又五ヶ山東西の間、大川筋籠の渡し七ヶ所あり、曾山村、奥津島村、猪谷村、田向村、細島村、中田村、渡るもの、籠の外渡る事ならず鳥ならで翔がたし。

〔二十四輩順拜圖會〕越中此所○山人美濃飛驒、越中三ヶ國の境にして、嶮山並び、登いふばかりなき難所也、其中にいと高く秀たる峻嶺を五箇山といふ、此嶮山の中に大河あり、雄神川といへり、

○中略不通の大河にして、玄かも兩方の岸高く、聳屏風を立たるがごとし、渡りの橋を設くる便なし、藤蔓を以て其太さ二尺廻りの大綱を作り、川の兩岸に引渡し、ひとつの籠を彼大綱にかけて、